

ろそろわれわれは気が付くべきではないだろうか。仮に人間の寿命を200才まで延長することに成功したとしても、それが本当に望ましいことなのだろうか。かつて人間が自然の循環の中で、生の意味と死の意味を理解し、「生に飽きて」死んでいったとすれば、たとえ40年の寿命しかなくても、人間としてははるかに幸福だったのではないだろうか。今日、死はひたすら忘却すべきもの、排除すべきものになってしまった。けれども、それにもかかわらず、

やはり人間は死を免れることはできないのである。そうだとすれば、他人の臓器を移植するなどという、免疫系という観点から見て全く不自然なことをしてまで、生命を延長する必要があるのだろうか。そうした生への執着は、真に幸福な生と死にとって妨害でしかないように思われる。むしろ問題なのは、「神なき、預言者なき時代」に生きざるを得ないわれわれが、新たに生と死の意味を見いだすことではないだろうか。

## ミレニアム — 魂の変容の転換点 —

文化女子大学文学部教授 高橋和夫

昨年「ミレニアム」という言葉が流行した。今年に入っても、意味がよくわからないまま、この言葉がまだ使われている。

Millennium は(千)を合成する言葉である。ミレニアムがただ千年を数える単位であれば、これは考古学や史学で使われている。例えば前4000年紀といえば、紀元前3001年～4000年の期間を指す。年代の設定に零年はないので、1千年紀は1年～1000年、2千年紀は1001年～2000年となる。だから3千年紀は2001年つまり今年からスタートする。

さて私たちがミレニアムというときに意識するのは、暦の上で千年単位の年の区切りがたまたま到来したということではない。元来ミレニアムという言葉の出所は聖書にある。そのためにミレニアムにはある種の宗教的雰囲気がつきまわっている。

新約聖書の「黙示録」20章がミレニアムの出所である。この章のテーマは、幻視の世界の終末に起こる、神・キリスト・天使群 vs. 悪魔・不信者の霊的戦闘である。究極的に前者側の勝利が訪れる前に、天使は古い巨獣である竜すなわち悪魔を縛って深淵に投げ込み、これを千年間監禁する。この千年間が「至福千年」と呼ばれ、復活した聖徒たちがキリストと共に世界を治める。千年が終わると、解き放たれた悪魔は大軍団を率いて聖徒たちに最後の戦いを挑むが、天から降る火に焼かれて、火と硫黄の池に投げ込まれ、そこで永遠の苦痛にさいなまれる。そして「新しいエルサレム」なる新天新地が出現して「事が成就」するのである。

ここから、ミレニアムは「千年」という期間と同時に、キリストと共に統治する「千年王国」とか「至福千年」を意味することが理解される。

キリスト教の終末観は、イエスの終末予言や「黙示録」の記述に基づいて、使徒たちの在世中から現代まで根強く存続している。ミレニアムに絡む世界の終わりは大略以下のようなものである。人類の腐敗は義の神の審判を受けねばならない。キリストの信者は墮落した世界からいつか別な清浄な世界へ移され、永遠の至福を享受し、悪に満ちた現世(地球)そのものが破滅し、悪人や不信者は永遠の責め苦を受けるか、あるいは絶滅するであろう。現世の「末日」は千年王国の前か後に来て、以上の出来事はキリストの再臨によって成就しよう。キリストは地上の空の雲に乗って現れ、すでに死んだ信者のバラバラになった肉体は奇跡的に結合されて復活し、永遠の至福に入ってゆく。

キリスト教徒が信じたこうした出来事は一度も起こっていない。しかし彼らは失望することなく、その時期を正確に予測できなかっただけだと考えた。キリスト教界では現在に至るまで「その日」の予言がさまざまな形でなされている。

悪しき世界の滅亡と義人の救済の日の到来を説く終末観は、始め(創造)と終わりがセットになった世界観を有するユダヤキリスト教的伝統に、ペルシアのゾロアスター教の世界観が結びついたものである。しかし無始無終の宇宙観をもつ仏教にも、「末法」とか弥勒信仰が見られるから、終末観は広

範な宗教現象ともいえよう。ただ世界創造の時期に関しては、西洋では自然科学の勃興期にこの推定がまじめになされた。今では一笑に付されるが、世界創造はケプラーの算定によればB.C.3993年、ニュートンによればB.C.3988年である。

18世紀の哲学者カントは有名なAntinomie（二律背反）の学説を唱え、人間の「理論理性」（認識する理性）は世界の起始については決して知りえないとした。宇宙に始まりがあったとも、なかったとも人間は考えることができるが、両方の考えは経験を越えた事柄ゆえに証明も反証明もできない。

世界の終末についてカントは『万物の終わり』という論文で論じている。彼は「万物の終わりという理念は、世界における事物の自然的経過ではなく道徳的経過に関する思弁によってのみ発生する。それゆえ世界の道徳的経過は超感性的なものにのみ関係する」と述べ、終末を時間内のどこかに予測することの無意味さを強調している。カントは「黙示録」の一部をこうした原則によって解釈し、聖書の予言的叙述はもっぱら道徳的に（つまり精神や心の善悪にかかわる状態に即して）理解すべきだと考える。カントの批判を無視するかのように、19～20世紀を見渡すと、終末・最後の審判・キリストの再臨の時間的な予測と、物質的世界の破滅とが大半の人びとの関心事となった観がある。

千という、それ自体意味のない数字にこだわって、紀元1000年には終末の恐怖が広がったが、結局は何も起こらなかった。次は2000年である。ノストラダムスだけでなく、2000年が近づくにつれて大半の終末予言が2000年に収斂してゆく。事例を少しあげよう。現代の千年王国運動の発端となった、アメリカの農夫 W. ミラーの聖書解釈は、キリストの再臨の時期を1843年頃と推定した。ジョナサン・エドワードによれば、千年王国は20世紀末に到来する。アメリカの再臨派の諸教会は、世の終わりを、1914、1919、1925、1975年等々と予言し、一つがはずれるたびに、計算のやり直しによって修正してきている。内村鑑三の再臨運動は有名な話である。

教会外でも、聖書のみならず占星術や催眠状態を援用して、多くの予言がなされた。周知のように、ノストラダムスは1999年7月に世界が減びると予言した。アメリカのエドガー・ケイシーが「リーディング」と呼ばれる、催眠状態で行った予言によれば、大陸の再形成・火山の爆発・地震による地殻の隆起

を伴う世界の終末は、1958～1998年に始まるという（1934年のリーディング）。

1995年に起きたオウム真理教の事件も、やはりこうした予言に関連している。彼らは世界の終末の幻想に捉えられて、予言を自作自演したのである。またウガンダの寒村で起きた、カルト教団「神の十戒復古運動」の悲劇も忘れえない。教団は終末を1999年12月31日と予言し、信者をノアの箱船になぞらえた教会に集めた。しかしその日が過ぎても何の変化もなく、迎えに来るはずの聖母マリアも現れなかった。信者の不満を封じ込めようと、2000年の3月17日に教団幹部は、信者を教会に閉じ込めて火を放った。500人の信者が焼殺されたのである。

それでは聖書や他の宗教聖典、あるいは予言者や心霊家の、終末やミレニアムの予言的記述は、まったく荒唐無稽で無意味なものなのだろうか。当然、こうした疑問が生じる。1999年7月の「朝日新聞」は、日本の大学生の半数がノストラダムスの予言に「不安」を感じていると報じている。こうした若者も2000年が来ると、ミレニアムだといって、言葉の意味をよく知らないまま、一種のお祭り気分になっている。

私たちは今、聖典や神話にはもっと深い内面的な意味が宿されているのではないかと考えるべきではないだろうか。カントによれば、健全な精神にとってミレニアムが意味をもつのは、事物の自然的経過ではなく、その道徳的経過である。道徳的経過とは、現代風にいえば、精神的・心的・霊的成長の過程、あるいは魂の変容過程ということであろう。世界の終末が来るとしたら、それは類としての人間（人類）の道徳性（つまり善悪の意識）や、霊性（つまり宗教的意識）の歪みや未成熟に関係する。世界の破滅とは、私たちの集合的な無意識の危機への象徴的な警告かもしれない。

18世紀の科学者兼神秘家であるスウェーデンボルグは、自分の霊的体験と思索に基づいて「黙示録」の「内なる霊的な意味」を探り、ユダヤキリスト教の伝統内に生きた人類の魂全体の成長・衰退・再生のプロセスを読み解いている。多くの黙示録解釈や終末予言は、一言でいえば、恐怖による信仰の強制であるが、スウェーデンボルグの解釈は人類の魂に愛と希望による成長への指標を示唆している。

こうした健全な思索の伝統は現代にも引き継がれている。著名なアメリカの神学者、L.ロバート・

ケック博士は昨年『聖なる探求——人類の魂の進化と未来』(Sacred Quest, The Evolution and Future of the Human Soul)をSwedenborg Foundation Publishersから出版した。それは人類の魂(Human Soul)つまりユングのいう人類の集合的無意識のレベルでの魂の進化を検証し、その未来の展望を拓く試みである。彼によれば、人類の魂はEpoch I, II, IIIの段階を経て進化する。Epoch IはB.C.33000~B.C.8000年で、この時期は幼児期と呼ぶ。その特性は、自然との一体感・無暴力・女性性の尊重等である。農耕定住生活の導入によるEpoch IIはB.C.8000年から現代まで続き、それは青春期であり、支配・暴力・個の時代である。Epoch IIIは現代に始まり未来へと続く成長過程であり、人類の魂が成年

となる時代に相当する。全一性を求めての自己の拡大・自然との再結合・差異の尊重・権力の民主化・グローバリズム等が課題となる。ケック博士によれば、人類の魂の進化は時機の熟したときに急激になされ、その後は長い平坦な道筋をたどる。現代は新旧の分岐点に位置し、激しい変革の時である。著者は学問の多分野に踏み込み、この壮大な仮説を検証しようと努めている。

ミレニアムは、その表層を捉えれば、たんなる気分転換である。また聖書や神話の字義への拘泥はカルト教団の悲劇につながる。今必要なのは、心や魂の変容の転換点を示唆する、その隠された意味の真摯な探求ではないだろうか。

## 現代科学の動向

ジャーナリスト 平野勝巳

相次ぐ医療過誤・薬害から遺伝子組み換え食品、臓器移植、東海村事件、少年による凶悪犯罪まで20世紀の最後の数年を騒がせたできごとの底辺には「科学と人間の乖離」という共通の問題が潜んでいる。

そう考えて、人間の未来に関心を抱くひとりのジャーナリストとして何らかの見通しをもっておきたい、と思って一昨年末に『生きてゆくためのサイエンス 生命論パラダイムの現在』(人文書院)という本を上梓した。

最先端のテーマを追っている科学者(哲学者)を独断と偏見でチョイスさせていただきインタビュー内容をまとめた本である。ちなみに拙著には本学会の元会長、湯浅泰雄先生にも登場いただいた。

そして、同書を上梓して私は、人間と乖離してしまった現代科学の現場で今、人間とのつながりを取り戻す新たな理論なり思想が生まれつつあることを確信した。以下に、その内容の一端を素描して「現代科学の動向」をつかむ一助にできればと思う。

現代の科学思想界で今、もっともヴィヴィッドな話題のなかに「複雑系」があり、「オートポイエシス」がある。科学の話題はほかにもあろうが、科学的通念に対する破壊力という点では、この二つが

群を抜いているように筆者には思える。

まず複雑系は、近代科学が前提としてきた「線形近似」という手法が多くの場合、現実の自然をとらえ損ねていることを暴露した。

「線形近似」とは、現象を表現するのに線形の因果関係を使い、その解が現象を再現しなければ、もとの方程式に線形からのズレを表す成分を摂動項として追加し、解にその効果を上乘せするという手法である。

これに対して複雑系の手法は、化学反応にも、電気回路にも、さらには惑星の軌道にさえ非線形現象が偏在し、「現実の自然は、近代科学が描いてきたように単純ではない」ということを理論的にあきらかにした。

こうして自然科学から社会科学まで今や「複雑系」という言葉があふれ返っている。それほどに複雑系のインパクトは大きい。

しかし、である。複雑系の解説書をいくら読んでも、よくわからない。研究者自身もその不可解さに翻弄されているような印象が強い。いったい複雑系の本質はどこにあるのだろうか。その難題を解く有力な論点の一つに松野孝一郎氏(長岡技術科学大学)の「内部観測」がある。